

# 雪たたき

幸田露伴

青空文庫



## 上

鳥が其巢を焚かれ、獸が其窟をくつがえされた時は何様なる。

悲しい声も能くは立てず、うつろな眼は意味無く動くまで、

鳥は篠むらや草むらに首を突込み、ただ暁の天を切ない心に待焦

るるであろう。獸は所謂駭き心になつて急に奔つたり、懼れの

目を張つて疑いの足取り遅くのそのそと歩いたりしながら、何ぞ

の場合には咬みつこうか、はたきつけようかと、恐ろしい緊張を

顎骨や爪の根に漲らせることを忘れぬであろう。

応仁、文明、長享、延徳を歴て、今は明応の二年十二月の初で

ある。此頃は上は<sup>かみ</sup>大將軍や管領から、下は<sup>しも</sup>庶民に至るまで、哀れな鳥や獣となつたものが何<sup>どれ</sup>程有つたことだつたらう。

此処は当時<sup>みん</sup>明や朝鮮や南海との公然または秘密の交通貿易の要衝で大富有の地であつた泉州堺の、町外れというのでは無いが物静かなところである。

夕方から零<sup>お</sup>ち出した雪が暖地には稀<sup>めず</sup>らしくしんと降つて、もう宵の口では無い今もまだ断<sup>き</sup>れ際<sup>ぎわ</sup>にはなりながらはらはらと降っている。片側は<sup>ぼうおく</sup>広く開けて野<sup>や</sup>菜<sup>さい</sup>圃<sup>ぼたけ</sup>でも続いているのか、其間に折々小さい茅<sup>ぼうおく</sup>屋<sup>や</sup>が点在している。他の片側は立派な丈の高い塀<sup>へい</sup>つづき、それに沿うて小溝が廻<sup>まわ</sup>されている、<sup>たいか</sup>大家の裏側通りである。

今時分、人一人通ろうようは無こい此ん様なところの雪の中を、何処を雪が降っているというように、寒いも淋しいも知らぬげに、昂こうぜん然として又悠然として田舎の方から歩いて来る者があつた。こんなところを今頃うろつくのは、哀れな鳥か獣か。小鳥では無いまでも、いずれ暖い洞窟が待っているのでは無い獣でもあるか。

薄うすむしろ筵の一端を寄せ束つかねたのを笠にも簔みのにも代えて、頭上から三角なりに被かぶつて来たが、今しも天そらを仰いで三四歩ゆるりと歩いた後に、いよいよ雪は断れるナと判じたのだろう、

「エーッ」

と、それを道の左の広みの方へかなぐり捨てざまに抛ほうつて了つた。

如何にも其様な悪びれた小汚い物を暫時にせよ被っていたのが癩に  
触るので、其物に感謝の代りに怒喝を加えて抛棄なげすてて気を宜よくし  
たのであろう。もつとも初から捨てさせるつもりで何処ぞで呉れ、  
捨てるつもりで被て来たには相違無いわびしいものであった。

少し速足になった。雪はもとよりべた雪だった。ト、下駄の齒  
の間に溜たまった雪に足を取られて、ほとほと顛ころびそうになった。が、  
素捷すばやい身のこなし、足の踏立ふみたて変えの巧さで、二三步泳ぎはした  
が、しやんと踏止まった。

「エーッ」

今度は自分の不覚を自分で叱る意で毒喝したのである。余程肚はら  
の中がむしゃくしゃして居て、悪気が噴出したがっていたのであ

ろう。

叱咤しつたしたとて雪は脱とれはしない、益々固くなつて齒の間に居しこるばかりだった。そこで、ふと見ると小溝の上に小さな板橋とおぼしいのが渡っているのが見えたので、其板橋の堅さを仮りてと橋の上にかかったが、板橋では無くて、柴橋に置土をした風雅のものだったのが一踏で覚り知られた。これではいけぬと思うより早く橋を渡り越して其突当りの小門の裾板に下駄を打当てた。乱暴ではあるが構いはしなかった。

「トン、トン、トン」

蹴け着つけるに伴なつて雪は巧く脱ぬけて落ちた。左足の方は済んだ。今度は右のをと、左足を少し引いて、又

「トン、トン」

と、蹴つけた。ト、漸ようやくに雪のしつかり嵌はまり込んだのが脱けた途端に、音も無く門は片開きに開いた。開くにつれて中の雪がほの白く眼に映った。男はさすがにギョツとしない訳にはゆかなかつた。

が、逃げもしなかつた、口も利かなかつた。身体は其その儘まま、不意に出あつても、心中は早くも立直つたのだ。自分の方では何とすることもせず、先方の出を見るのみに其瞬間は埋められたのであつた。然し先方は何のこだわりも無く、身を此方へ近づけると同時に、何の言葉も無く手をさしのべて、男の手を探り取つてやさしく握つて中へ引入れんとした。触つた其手は暖かであつた、

なよやかであつた。其力はやわらかであつた、たしかに鄙いやしく無い女の手であつた。これには男は又ギョツとした。が、しかし逃げもしなかつた、口もきかなかつた。

「何んな運にでもぶつかつて呉りよう、運というものの面つらが見た  
い。」

というような料りよう簡けんが日頃定きまつて居るので無ければ斯こう様は出来ぬところだが、男は引かるるままに中へ入つた。

女は手ばしこく門を鎖とぎした。佳よい締り金物と見えて音も少く、しかもびつたりと嚴重に鎖されたようだった。雲の余りの雪は又ちらちらと降つて来た。女は門の内側に置いてあつた恐ろしい大きな竹の笠、——茶の湯者の露次に使う者を片手で男の上へかざ

して雪を避けながら、片手は男の手を取って謹まやかに導く。庭  
というでは無い小広い坪の中を一筋敷詰めてある石道伝いに進む  
と、前に当つて雪に真黒く大きな建物が見えた。左右は張り出た  
ように、真中は引入れてあるように見えたが、そこは深<sup>ふか</sup>廂<sup>かびさし</sup>に  
なつていて、其突当りは中口とも云うべきところか。其処へかか  
ると中に灯<sup>とも</sup>火<sup>しび</sup>が無く、外の雪明りは届かぬので、ただ女の手に  
引かるるのみの真暗闇に立つ身の、男は聊<sup>いささ</sup>か不安を覚えぬでは無  
かった。

然し男は「ままよ」の安心で、大戸の中の潜<sup>くぐ</sup>り戸<sup>ど</sup>とおぼしいと  
ころを女に従つて、ただ只<sup>ひたすら</sup>管<sup>あしもと</sup>に足<sup>あしもと</sup>許<sup>もと</sup>を気にしながら入つた。  
女は一寸復<sup>また</sup>締<sup>ひ</sup>りをした。少し許<sup>ばか</sup>りの土間を過ぎて、今宵<sup>こよひ</sup>の不思議

な運を持来らした下駄と別れて上へあがった。女は何時の間に笠を何処へ置いたろう、これに気付いた時は男は又ギョツとして、其のさかしいのに驚いた。板の間を過ぎた。女は一寸男の手を上げた。男は悟った。畳厚さだけ高くなるのだナと。それで躓つまずくことなども無しに段々進んだ。物騒な代よの富家大家は、家の内に上り下りを多くしたものであるが、それは勝手知らぬ者の潜入ちんに闖い入ゆうを不利ならしむる設けであつた。

幾間かを通つて遂に物音一ツさせず奥深く進んだ。未だ灯火を見ないが、やがてフーンと好い香がした。沈じんでは無いが、外国の稀品きひんと聞かるる甘いものであつた。

女はここへ坐れと云うように暗示した。そして一寸会釈したよ

うに感じられたが、もの静かに去った。男は外国織物と思わるる  
稍堅ややい茵しとねの上にむんずと坐った。室隅には炭火が顔は見せねど有  
りしと知られて、室へやはほんのりと暖かであった。

これだけの家だ。奥にこそ此様こんなに人氣ひとけ無くはしてあれ、表の方  
には、相応の男たち、腕筋も有り才覚も有る者どもの居らぬ筈は  
無い。運の面は何様どんなつらをして現われて来るものか、と思えば、  
流石さすがに真暗の中に居りながらも、暗中一ぱいに我が眼が見張られ  
て、自然と我が手が我が左の腰に行つた。然し忽たちまち思返して、運  
は何様な面をしておれの前に出て来るか知らぬが、おれは斯様こんな  
面をして運に見せて遣やれ、とにったりとした笑い顔をつくつた。  
其時かみて上手の室に、忍びやかにはしても、男の感には触れる衣きぬず

れ足音がして、いや、それよりも紅燭こうしよくの光がさつと射して来て、前の女とおぼしいのが銀の燭台を手にして出て来たのにつづいて、留木のかおり咽むせるばかりの美服の美女が現われて来た。が、互に能くも見交さぬに、

「アツ」

と前の女は驚いて、燭台を危く投げんばかりに、膝も腰も潰つぶえ砕けて、身を投げ伏して面おもてをかく匿して終しまった。

「にツたり」

と男は笑った。

主人は流石に主人だけあつた。これも驚いて仰反のけぞつて倒れんばかりにはなつたが、辛く踏止まって、そして踏止まると共に其姿

勢で、立つたまま男を憎悪と憤怒との眼で睨み下した。悍しい、峻しい、冷たい、氷の欠片のような厳しい光の眼であった。しかし美しいことは美しい、——悪の美しさの眼であった。

「にツたり」

と男は笑った。曇った鏡が人を映すように男は鈍々と主人を見上げた。年はまだ三十前、肥り肉の薄皮だち、血色は激したために余計紅いが、白粉を透して、我邦の人では無いように美しかった。眼鼻、口耳、皆立派で、眉は少し手が入っているらしい、代りに、髪は高貴の身分の人の如くに、縮ねずに垂れている、其処が傲慢に見える。

夜盗の類か、何者か、と眼稜強く主人が観た男は、額広く鼻高

く、上り目の、朶たふ少き耳、鎗やりおとがい硬ひばまばそうな鬚疎らに生い、甚だ多き髪を茶ちやせん筧とも無く粗末に異様に短く束つかねて、町人風の身づくりはしたれど更に似合わしからず、脇差一本指したる体、何とも合点が行かず、瘦やせて居れども強そうに、今は貧相なれども前には人の上に立てるかとも思われ、盜賊の道の附入りということを現在には為したのなれど、癩かんぺき癬強まさくて正しく意地を張りそうにも見え、すべて何とも推量に余る人品であつた。その不氣味な男が、前に

「にツたり」

と笑つたきり、何時までも顔の様子をかえず、にツたりを木彫きぼりにしたような者に「にツたり」と対むかつていられて、憎悪も憤怒も次

第に裏崩れして了った。実に怒る者は知る可し、笑う者は測るべからず、である。求むる有るものは弱し、恐るるに足らず、求むる無き者は強し、之を如何ともする能<sup>あた</sup>わず、である。不可解は恐怖になり、恐怖は遁<sup>とんとう</sup>逃を思わしめるに至った。で、何も責め立てられるでも無く、強請されるでも無いが、此男の前に居るに堪え無くなって、退<sup>の</sup>こうとした。が、前に泣<sup>なき</sup>臥<sup>ふ</sup>している召使を見て、そこは女の忽<sup>こっねん</sup>然として憤怒になつて、

「コレ」

と、小さい声ではあつたが叱るように云つた。

「……………」

「……………」

「……………」

であつて、短い時間では有つたが、非常に長い時間のように思われて、女は其の無言無物の寂せきばく寞の苦に、十万億土を通るといふのは斯様いふものででもあるかと苦んでいたので、今、「コレ」と云われると、それが厳しい叱咤であろうと何であろうと、活路を死中に示され、暗夜に灯火を得たが如く、急に涙の顔を挙げて、

「ハイ」

と答えたが、事態の現在を眼にすると、復また今更にハラハラと泣いて、

「まことに相済みませぬ疎忽そこつを致しました。御相図おあいずと承わり、又御物ごしが彼あのかた方様其そのまま儘でござりましたので、……如何様にも

私を御成敗下さりまして、……又此方様は、私、身を捨てましても、御引取いただくようお願いしまして、然さよう致しますれば……」  
と、今まで泣伏していた間に考えていたものと見えて、心有りたけをよじ澱みなく言立てた。眞実はおもてに現われて、うそや飾りでも無いことは、其の止途とめど無い涙に知れ、そして此の紛れまぎ込者を何様どうして捌さばこうか、と一生懸命眞剣になつて、男の顔を伺つた。目鼻立のバラリとした人並以上の器量、純粹の心を未だ世に濁されぬ忠義一いち図ずの立派な若い女であつた。然し此女の言葉は主人の昨日きのう今日きょうを明白にして了つた。そして又眞正面から見た

「にツたり」

の木彫に出会つて、これが自分で捌き得る人物だろうかと、大おおにおい

疑懼ぎくの念を抱かざるを得なくなり、又今更に艱苦かんくにぶつかったのであつた。

主人の憤怒はやや薄らいだらしいが、激情が退くと同時に冷透の批評の湧く余地が生じたか、

「そちが身を捨てましても、と云つて、ホホホ、何とするつもりかえ。」

と云つて冷笑すると、女は激して、

「イエ、ほんとに身を捨てましても」

とムキになつて云つたが、主人は

「いや、それよりも」

と、女を手招きして耳に口を寄せて、何かささやいた。女は其意

を得て屏風びょうぶを遶めぐり、奥おくの方かたへ去り、主人は立つても居られず其便べんに坐した。

やがて女は何程か知れぬが相当の金銀を奉書を敷いた塗三宝に載せて持て来て男の前に置き、

「私わたし軽きようこつ 忽とつより誤とつて御足を留とどめ、まことに恐れ入りました。

些さしやう少せうにはござりますれど、御用を御欠かせ申しましたる御勘弁料差上げ申します。何なに卒とぞ御納め下されまして、御随意御引取下されまするようにな。

と、利口に云廻して指をついて礼をすると、主人も同時に軽かしらく頭かしらを下げて挨拶した。

すると「にツたり」は「にツたり」で無くなった。俄にわかに強く衝つ

き動かされて、ぐらぐらとなつたように見えたが、憤怒と悲みとが交り合つて、ただ一つの真面目さになつたような、犯し難い真面目さになつて、

「ム」

と行詰つたが如くに一息した。真面目の顔からは手強い威てこわが射した。主人も女も其威に打たれ、何とも測りかねて伏目にならざるを得なかつた。蠟燭ろうそくの光りにちらついていた金銀などは今誰の心にも無いものになつた。主人にも女にも全く解釈の手がかりの無い男だつた。

「おのれ等」

と、見だての無い衣裳を着けている男の口からは似合わない尊

大な一語が発された。然し二人は圧倒されて愕然がくぜんとした、中辺の高さでは有るが澄んで良い声であつた。

「揃ののしいも揃ののしつて、感心しどころのある奴の。」

罵ののしらるべくもあるところを却かえつて褒められて、二人は裸身はだかみの背中を生蛤なまぐりで撫でられたでもあるような変な心持がしたろう。

「これほどの世間の重宝を、手ずからにても取り置きすることか、召使に心ままに出し入れさすること、日頃の大气、又下しもの者を頼みきつて疑わぬところ、アア、人の主しゅたるものは然様そうの無うては叶わぬ、主に取りたいほどの器量よし。……それが世に無くて、此こ様んなどころにある、……」

二人を相手にしての話では無かつた。主は家隸けらいを疑い、郎党は

主を信ぜぬ今の世に對しての憤懣ふんまんと悲痛との慨歎がいたんである。此こ家の主人のやはかく云われて、全然意表外のことを聞かされ、へどもどするより外は無かつた。

「しかし、此処の器量よしめの。かほどの器量までにおのれを迫せり上げて居おるのも、おのれの私を成そうより始まつたらう。エーッ、忌々しい。」

眼の中より青白い火が飛んで出たかと思われた。主人は訳はわからぬが、其一いっせん閃の光に射られて、おのずと吾わが眼を閉じて了つた。

「この女めも、弁口、取りなし、下の者には十二分の出来者。しかも生命いのちを捨ててもと云居つた、うその無い、あの料りょうけん簡分別、

アア、立派な、好い侍、かわゆい、忠義の者ではある。人に頼まれたる者は、然様のうては叶わぬ。高禄をくれても家隸けらいに有もちたいほどの者ではある。……しかし大すじのことが哀れや分つて居らぬ、致方無い、教えの足らぬ世で、忠義の者が忠義でないことをして、忠義と申うて死んで行く。善人と善人とが生命を棄てて、世を乱している。エーツ忌々しい。」

全然二人の予期した返答は無かつたが、ここに至つて、此の紛れ入り者は、何の様な者かということが臚おぼろげ氣に解つて来た。しかし自分達が何様扱われるかは更に測り知られぬので、二人は畏い服ふくの念の増すに連れ、愈々いよいよ底の無い恐怖に陥つた。

男はおもむろに室へやの四方を看まわした。屏風びょうぶ、衝立ついたて、御厨みず

子、調度、皆驚くべき奢侈しやしのものばかりであつた。床の軸は大きな傳彩ふさいの唐絵からえであつて、脇棚にはもとより能くよは分らぬが、いずれ唐物と思われる小さな貴げなものなどが飾られて居り、其の最も低い棚には大きな美しい軸盆様のものが横たえられて、其上に、これは倭物わものか何かは知らず、由緒ありげな笛が紫絹を敷いて安置されていた。二人は男の眼の行く方かたを見護つたが、男は次第に復「にツたり」に反つた。透すかさず女は恐る恐る、

「何卒わたくし不調法を御ゆるし下されますよう、如何ようにも御詫おわびの次第は致しまする。」

と云うと、案外にも言葉やさしく、

「許してくれる。」

と訳も無く云放つた。二人はホツとしたが、途端にまた

「おのれの疎忽は、けも無い事じゃ。ただし此家の主人はナ」

と云いかけて、一寸口をとどめた。主人と云つたのは此処には居らぬ真の主人を云つたことが明らかだったから、二人は今さらに心を跳らせた。

「実は、我が昵懇のものであるでの。」

と云い出された。二人は大鐘を撞かれたほどに驚いた。それが虚言か真実かも分らぬが、これでは何様いう始末になるか全く知れぬので、又新に身内が火になり氷になった。男はそれを見て、「にツたり」を「にたにたにた」にして、

「ハハハ、心配しおるな、主人は今、海の外に居るので。安心

し居れ。今宵こよいの始末を知らそうとて知らそう道は無い。帰つて来居る時までには、おのれ等、敵の寄せぬ城に居るも同然じや。好きにし居れ、おのれ等。樂まば樂め。人のさまたげはせぬが功德じや。主人が帰るそれまでは、我とおのれ等とは何の関りも無い。帰る。宜かろう。何様じや。互に用は無い。勝手にしおれおのれ等。ハハハハハハ、公方くぼうが河内正覺寺かわちしょうがくじの御陣にあらせられた間、桂の遊女を御相手にしめされて御慰みあつたも同じことじや、ハハハハハハ。」

と笑つた。二人は畳こゝべに頭をすりつけて謝した。其間ひまに男は立上つて、手早く笛を懐中して了つて歩き出した。雪に汚れた革足袋かわたびの爪先の痕あとは美しい青畳の上に点々と印いんされてあつた。

## 中

南北朝の頃から堺は開けていた。正平の十九年に此処の道祐どうゆうというものの手によつて論語が刊出され、其他文選もんぜん等の書が出されたことは、既に民戸の繁栄して文化の豊かな地となつていたことを語つている。山名氏清うじきよが泉州守護職となり、泉府と稱して此処に拠つた後、応永の頃には大内義弘が幕府から此地を賜わつた。大内は西国の大大名で有つた上、四国中国九州諸方から京洛きやうらくへの要衝の地であつたから、政治上交通上經濟上に大発達を遂げて愈々いよいよ殷賑いんしんを加えた。大内は西方智識の所有者であつ

たから歟、堺の住民が外国と交商して其智識を移し得たからである歟、我邦の城は子然として町の内、多くは外に在るのを常として、町は何等の防備を有せぬのを例としていたが、堺は町を繞らして濠を有し、町の出入口は嚴重な木戸木戸を有し、堺全体が支那の城池のような有様を持っていた。乱世に於けるかかる形式は、自然と人民をして自ら治むることの有利にして且喫緊なことを悟らしめた。当時の外国貿易に従事する者は、もとより市中の富有者でもあり、智識も手腕も有り、従つて勢力も有り、又多少の武力——と云つてはおかしいが、子分子方、下人僮僕の手兵よりの者も有つて、勢力を實現し得るのであつた。それで其等の勢力が愛郷土的な市民に君臨するようになったか、市民が其等

の勢力を中心として結束して自己等の生活を安固幸福にするのを悦よろこんだためであるか、何時となく自治制度様のものが成立つに至つて、市内の豪家ごうか鉅商きよしょうの幾人かの一団に市政を頼むようになった。木戸木戸の権威を保ち、町の騒動や危険事故を防いで安寧を得せしむる必要上から、警察官的権能をもそれに持たせた。民事訴訟の紛ふん紜うん、及び余り重大では無い、武士と武士との間に起つたので無い刑事の裁断の権能をもそれに持たせた。公辺からの租税夫役等の賦課其他に対する接衝等をもそれに委ゆだねたのであった。實際に是かくの如き公私の中間者の発生は、榮え行こうとする大きな活気ある町には必要から生じたものであつて、しかも猫の眼の様にかわる領主の奉行、——人民をただ納税義務者とのみ見みな做

して居る位に過ぎぬ戦乱の世の奉行などよりは、此の公私中間者の方が、何程か其土地を愛し、其土地の利を図り、其人民に幸福を齎もたらすものであつたか知れぬのであつた。それで足利幕府あしかがでも領主でも奉行でも、何時となくこれを認めるようになったのである。此等の人々を当時は、納屋衆、又は納屋貸衆と云い、それが十人を定員とした時は納屋十人衆などと云つたのであつた。納屋とは倉庫のことである。交通の便利は未だ十分ならず、商業機関の発達も猶幼稚なほであつた時に際して、信頼すべき倉庫が、殆んど唯一の此の大商業地に必要で有つたろうことは云うまでも無い。納屋貸衆は多くの信ぜらるる納屋を有して之を貸し、或は其在庫品に対して何等かの商業上の便宜を与えもしたで有ろう

から、勿論世間の為にもなり、自分の為にも利を見たのであろう。夙つとに外国貿易に従事した堺の小島太郎左衛門、湯川宣阿せんあ、小島三郎左衛門等は納屋衆の祖先となつたのか知れぬ。しかも納屋衆は殆ど皆、朝鮮、明、南海諸地との貿易を営み、大資本を運転して、勿論冒険的なるを厭いとわずに、手船しゆせんを万里に派し、或は親しく渡航視察の事を敢てするなど、中々一通りで無い者共で無くては出来ぬことをする人物であるから、縦たとい富有の者で無い、丸裸の者にしてからが、其の勇氣が逞たくましく、其経営に筋が通り、番頭、手代、船頭其他のしたたか者、荒くれ者を駕馭がぎよして行くだけのことでも相当の人物で無くてはならぬのであつたらうから、町の者から尊敬もされ、依信もされ、そして納屋衆と人民とは相持あいもちに持

合つて、堺の町は月に日に榮を増して行つたものであろう。後に至つて、天正の頃呂宋ルソンに往来して呂宋助左衛門と云われ、巨富を擁して、美邸を造り、其死後に大安寺となしたる者の如きも亦是れ納屋衆であつた。永禄年中三好家の堺を領せる時は、三十六人衆と称し、能登屋臙脂屋が其首しゆであつた。信長に至つては自家集權を欲するに際して、納屋衆の崛くつきよう強にを惡にくみ、之を殺して梟きよう首しゆし、以て人民を恐怖せしめざるを得無かつたほどであつた。いや、其様そんな後の事を説いて納屋衆の堺に於て如何様の者であつたかを云うまでも無く、此物語の時の一昨年延徳三年の事であつた。大内義弘亡滅の後には細川の家領けりようになつたが、其の伶俐れいりで、機変を能く伺うところの、冷酷けんしゆん峻しゆんの、飯綱いづなつか使つかい魔法使

いと恐れられた細川政元が、其の頼み切つた家臣の安富元家を此処の南の莊しょうの奉行にしたが、政元の威権と元家の名誉とを以てしても、何様どうもいざこざが有つて治まらなかつたのである。安富は細川の家では大したもので、応仁の恐ろしい大乱の時、敵の山名方の幾頭いぬしらかの勇將軍が必死になつて目ざして打取つて辛くも悦んだのは安富之綱であつた。又打死うちじはしたが、相国寺の戦に敵の総帥の山名宗全を脅かして、老体の大入道をして大汗をかいて悪戦させたのは安富喜四郎であつた。それほど名の通つた安富の家の元家が、管領細川政元を笠きに被て出て来ても治まらなかつたというのは、何で治まらなかつた歟、納屋衆が突張つたからで無くて何であろう。それほど誇りを有もつた大商業地、富の地、殷賑

の地、海の向うの朝鮮、だいみん大明、りゅうきゅう琉球から南海の果まで手を  
 伸ばしている大腹中のしたたか者の蟠踞ばんきよして、一種特別の出し  
 風を吹出し、海風を吹入れている地、泣く児と地頭には勝てぬに  
 相違無いが、内々は其諺ことわざ通りに地頭を——戦乱の世の地頭、錢ば  
 かり取りたがる地頭を、飴あめばかりせびる泣く児のように思ってい  
 る人民の地、文化は勝すぐれ、学問諸芸遊伎等ゆうぎまでも秀でてい  
 る地の、其の堺おおしよじの大小路を南へ、南の荘の立派な屋並うちの中の、分けても  
 立派な堂々たる家、納屋衆の中でも頭株の嚙脂屋の奥の、内庭を  
 前にした美しい小室に、火桶ひおけを右にして暖かあかげに又安泰に坐り込  
 んでいるのは、五十余りの清らかな顔あかの、福々ふとしい肥ふとり肉じしの男、  
 にこやかに

「フム」

とばかりに軽く聴いている。何を些細な事ささいという調子である。これに対して下坐に身を伏せて、如何にもかしこまり切っている女は、召使筋の身分の故からというばかりでは無く、恐れと悲しみとにわなわなと顫ふるえているのは、今下げた頭かしらの元結もとゆいの端の真中に小波さざなみを打っているのにも明らかであり、そして訴願の筋の差さしせままった情に燃えていることと見える。

「……………」

「……………」

双方とも暫時しばし言葉は無かった。屈託無げにはしているが福々ふくふくややの方は法ほつたい体たい同様の大きな艶々した前まえ元げ頭あたまの中で何か考えて

いるのだらう、にこやかに繕っているが、其眼はジツと女の下  
げている頭かしらを射透いすかすように見守っている。女は自分の申出たこと  
に何の手答のある言葉も無いのに堪えかねたか、やがて少し頭を  
擡もたげた。燐みを乞う切ない眼の潤み、若い女の心の張った時の常  
の血の上った頬くれないの紅色、誰が見てもいじらしいものであった。

「どうぞ、然そ様ういう訳でございますれば、……の御帰りになりま  
する前までに、こなた様の御力を以て其品を御取返し下さいます  
るよう。」

と復また一度、心から頭を下げた。そして、

「御帰りの近々に逼つて居りますことは、こなた様にも御存知の  
通り。御帰りになりますれば、日頃御重愛ごちようあいの品、御手ならしの

品とて、しばらく御もてあそび無かつた後ゆえ、直にも御心のそれへ行くは必ひつじょう定、其時其御秘蔵が見えぬとあつては、御方様の御申訳の無いはもとより、ひいては何の様なことが起ろうも知れませぬ。御方様のきつい御心配も並一通りではござりませぬ。それ故に、御方様の、たつての御願ひ、生命いのちにもかかることと思お召ぼしめして、どうぞ吾わが手に戻るようの御計らいをと、……」

生命にもかかるの一語は低い声ではあつたが耳に立たぬわけには行かなかつた。

「ナニ、生命にもかかる。」

最高級の言葉を使ったのを福々爺は一寸咎とがめた迄ではあるが、女に取つてはそれが言葉甲斐の有つたので気がはずむのであろう、

やや勢込んで、

「ハイ、そうおツしやられたのでござりまする。全く彼の<sup>あ</sup>笛が無  
いとありましては、わたくし共めまでも何の様な……」

「いや、<sup>むしどの</sup>賀殿があれを二<sup>に</sup>の無いものに大事にして居らるるは<sup>かね</sup>予て  
知つてもおるが、……多寡が一<sup>こぶつ</sup>管の古物じやまで。ハハハ、何で

このわし程のもの娘の<sup>いのち</sup>生命にかかろう。帰つて申せ、わしが<sup>わ</sup>詫  
びてやる、心配には及ばぬとナ。女は夫を持つと気が小さくなる  
というが、娘の時のあれは困り者のほどな大氣の者であつたが、  
余程<sup>あ</sup>賀殿を大事にかけていると見えて、大層女らしくなり居つた  
ナ。好いわ、それも夫婦中が細やかなからじや。ハハハハ。」

「……………」

「分らぬか、まだ。よいか、わしが無理借りに此方へ借りて来て、七ツ下りの雨と五十からの芸事、とても上りかぬると謗らるるをそし関わかまず、しきりに吹習うている中に、人の居らぬ他所へ持つて出よそての帰るさに取落して終しもうた、気が付いて探したが、かいくれ見えぬ、相済まぬことをした、と指を突いてわしがあやまつたら聳殿は頬を膨ふくらしても何様にもなるまい。よいわ、京へ人を遣つて、当りを付けて瘡公卿やせくげの五六軒も尋ね廻めぐらせたなら、彼笛あのに似つこらしゆうて、あれよりもずっと好い、敦盛あつもりが持ったとか誰やらが持ったとかいう名物も何の訳無う金で手に入る。それを代りに与えて一寸あやまる。それで一切は済んで終しまう。たとえ聳殿心底は不足にしても、それでも腹なりが治まらぬとは得云うまい。代り

に遣る品が立派なものなら、却かえつて喜んで恐縮しようぞ。分つたろう。……帰つて宜よう云え。」

話すに明らさまには話せぬ事情を抱かかいていて、笛の事だけを云つたところを、斯こう様すらりと見事に捌さばかれて、今更に女は窮して終つた。口がききたくても口がきけぬのである。

「……………」

何と云つて宜いか、分らぬのである。しかし何様あつても此儘こゝろに帰つたのでは何の役にも立たぬ。これでは何様あつても帰れぬのである。苧おごけの中に苧おは一杯あるのだが、抽出ひきだして宜い糸口が得られぬ苦みである。いや糸口はハッキリして居て、それを引っぱり出しさえすれば埒らちは明くのだが、それを引出すことは出来

なくて、強いて他の糸口、それは無いに定<sup>き</sup>まっている糸口を見出さなくてはならぬので、何とも為方の無い苦みに心が躓<sup>もが</sup>かれていますのである。

「……………」

頭<sup>かしら</sup>も上げ得ず、声も出し得ず、石のようになっていて意外さに、

福々爺も遂に自分の会得のゆかぬものが有ることを感じ出した。

其感じは次第次第に深くなった。そして是は自分の智慧の箭<sup>や</sup>の的たるべき魔物が其中に在ることは在るに違無いが何処に在るか分らないので、吾<sup>わ</sup>が頼むところの利器の向け処を知らぬ悩みに苦しめられ、そして又今しがた放った箭が明らかに何も無いところに取りっぱなしにされた無効さの屈辱に憤りを覚えた。福々爺もや

や福々爺で無くなった。それでも流石さすがに尖り声とがなどは出さず、やさしい気でいじらしい此女を、いたわるように

「そうしたのではまずいのか。」

と問うた。驚くべき処世の修行鍛錬を積んだ者で無くては出ぬ語調だった。女は其の調子に惹ひかれて、それではまずいので、とは云兼ねるといふ自意識に強く圧おされていたが、思わず知らず

「ハ、ハイ」

と答えると同時に、忍び音ねでは有るが激しく泣出して終った。苦惱が爆発したのである。

「何も彼かも皆わたくしの恐ろしい落度から起りましたので。」

自ら責めるよりほかは無かったが、自ら責めるばかりで済むこ

とでは無い、という思が直に※の奥からむね逼り上つて、

「おかた様のきつい御難儀になりました。若し其の笛を取つた男が、笛を証拠にして御帰りなされた御主人様におかた様の上を悪しく申しますれば、証拠のある事ゆえ、拔差しはならず、おかた様は大変なことに御成りなされます。それで是非共に、あれを、御自由のこなたぎまきく此方様の御手で御取返しを願いに、必死になつて出ました訳。わたくしめに死ねとなら、わたくしは此処でも何処でも死んでも宜しゅうございます、どうぞ此願の叶えられますよう。」

と、しどろもどろになつて、代りの品などが何の役にも立たぬことをいう。潜在している事情の何かは知らず重大なことが感ぜら

れて、福々爺も今はむずかしい顔になった。

「ハテ」

と卒爾そつじの一句を漏らしたが、後はしばらく無言になった。眼は半眼になって終った。然しまだ苦んだ顔にはならぬ、碁の手でも按あんずるような沈んだのみの顔であった。

「取った男は何様どんな男だ。其顔つきは。」

「額広く鼻は高く、きれの長い末上りのきつい目、朶たぶの無いような耳、おとがい細く一体に面長で、上髭うわひげ薄く、下鬚したひげまば疎らに、身のたけはすらりと高い方で。」

「フム——。……して浪人か町人か。」

「なりは町人でござりましたなれど、小脇差。御発明なおかた様

は慥たしかに浪人と……」

問わるるままに女は答えた。それを咎とがめるといふのではなく、  
「娘もそなたもそれほど知つたものに、何で大切だいじな物を取らせた  
。」

と、おのずから出ずべき疑をおのずからの調子で尋ね問われて、  
女はギクリと行詰まつたが、

「それがわたくしの飛んでも無い過たてきちからでござりまして。」  
と、悪いことは身にかぶつて、立切たてきつて終う。そして又切なさに  
泣いて終う。福々爺の顔は困惑に陥り、明らかにもた悶えだした。然  
し、

「よいよい、そなたを責めるのでは無い。訳が分らぬから聞くま

でじゃ。では面は<sup>おもて</sup>見知つても、名はもとより知らぬものじゃナ。前々から知つた者でも無いナ。」

と責めるでは無いと云いながら責め立てる。

「ハイ。ハイ。取られました其夜初めて見ました者で。」  
と答える。

「フム——。そなた等で承知して奪<sup>と</sup>らせよう訳は無いことじゃ。忍び入ることなどは叶わぬようにしてもあるし、又物騒の世なれば、二人三人の押入り者などが来るとも、むざとは物など奪られぬよう、用心の男も飼うてある家じゃ。それじゃに、そなた等、おもては知つたが、知らぬ者に、大事なものを奪られたというのか。フム——。そして何も彼もそなたの恐ろしい落度から起つた

というのじゃナ。身の罪に責められて、そなたは生命を取られてもと云い居るのじゃナ。」

「ハイ、あの有難いお方様のために、御役に立つことならば只今でも……」

真紅まつかになつた面をあげて、キラリと光つた眼に一生懸命の力を現わして老主人の顔を一寸見たが、忽ちたちまにして崩折くずおれ伏した。髪は領元えりもとからなだれて、末は乱れた。まったく、今首を取るぞと云われても後へは退ひかぬ態ていに見えた。

心の誠というものは神力しんりきのあるものである。此の女の心の誠は老主人の心に響いたのであろう。主人の面には甘さも苦さも無くなつて、ただ正しい確乎しかとした真面目さばかりになつた。それ

は利害などを離れて、ただ正しい解釈と判断とを求めようとする真剣さの威光の籠り満ちているものであつた。

「して其男が聳殿に何事を申そうという心配があるのか。何事。何事を……」

的の真ただ中に箭鏃やじりのさきは触れた。女は何とすることも出来無かつた。其儘そのままに死にでもするように、息を詰めるより外はなかつた。

「……………」

「……………」

恐るべき沈黙はしばし続いた。そして其沈黙はホンノしばしであつたに聞らず、三阿僧祇劫さんあそぎごうの長さでもあるようだった。

「チュツ、チュツ、チュ、チュツ」

庭樹に飛んで来た雀が二羽三羽、枝遷りえだうつして追隨しながら、睦むつましげに何か物語るように鳴いた。

「告口……証拠……大變なことになる……フム——」

と口の中で独りつぶやいて居た主人は、突然として

「アツ」

と云つて、恐ろしいものにも打のめされたように大動揺したが、直ちに

「ム」

と唇くちびるを結んで自ら堪えた。我を失つたのであつた。大努力したのであつた。今や満身の勇気を振り起したのであつた。勇氣は勝つ

た。顔は赤みさした。

「アア」

という一嘆息に、過ぎたことはすべて葬り去つて終つて、<sup>しま</sup>

「よいわ。子は親を悩ませ苦めるようなことを為し居つても、親は子を何処までも可愛く思う。<sup>かわゆ</sup>それを何様とも仕ようとは思わぬ。あれはかわゆい、助けてやらねば……」

と、自分から自分を評すように云つた。たしかにそれは目の前の女に對つて言つたのでは無かつた。<sup>むか</sup>然し其調子は如何にもしんみりとしたもので、<sup>りこ</sup>伶俐な此の女が歸つて其主人に伝え忘れるべくも無いものであつた。

一切の事情は洞察されたのであつた。

女の才弁と態度と真情とは、事の第一原因たる吾が女主人の非行に触れること無く、又此家の老主人の威厳を冒すことも無く、巧みに一枝の笛を取返すことの必要を此家の主人に会得させ、其力を借ることを乞いて、將に其目的を達せんとするに至つたのである。此家の主人の処世の老練と、觀照の周密と、洞察力の鋭敏とは、一切を識破して、そして其力を用いて、將に発せんとする不幸の決潰を阻止せんとするのである。しかも其の中でも老主人は人の心を攬ることを忘れはし無かつた。

「分つた。言う通りにして計らつてやる。それにしてもそちは見上げた器量じゃ。過ちは時の魔というものだ、免してやる。口もよく利ける、氣立も好い、感心に忠義どころも厚い。行末は必ず

好い男を見立てて出世させて遣る。」

と附足して、やさしい眼で女を見遣った時は、前の福々爺ふくふくやになつていた。女はただ頭かしらを下げて無言に恩を謝するのみであつた。

「ただナ、惜いことは其時そちが今一働きして呉れていたら十二分だったものを。其様に深くは、望む方が無理じゃが。あれも其処までは気が廻らなかつたらうか。」

「ト仰おっしありまするのは。」

「イヤサ、少し調べれば直じきに分ることだから好いようなものの、此方こなたは何の何某なにがしというものの家と、其男めには悟られて了つて居ながら、其男めを此方では、何処の何という者と、大よその見当ぐらいも着かぬままに済ませたは、分が悪かつたからナ。」

と余談的に云うと、女は急に頭を上げて勇氣に充ちた面持で、小聲ではあるが、

「イエ、其事でございまするなら、一旦其男を出して歸らせました後、直ただちに身づくろい致しまして、低下駄むぢょうちんの無提灯、幸いの雪の夜道にポツツリと遠く黒く見えまする男のあとを、悟られぬようつけてまいりました。」

と云いかくるに、老主人は思わず知らず声を出して、

「ナニ、直に其後をつけたというのか。」

「ハイ、悟られぬよう……、見失われぬよう……、もし悟られて逆に捉えられましたならば何と致しましょうか、と随分切ない心遣いをいたしながら、冷たさに足も痛く、寒さに身も凍り縮みまし

たなれど、一生懸命、とうとう首尾好くつけおおせました。」

主人は感心極まったので身を乗出して、

「才才。ヤ、えらい奴じゃ。よくやり居った。思いついて出たのもえらいが、つけ果せたとは、ハテ恐ろしい。女にしては恐ろしいほどの甲斐性者。シテ……」

「イエ何、御方様の御指図でござりましたので、……私はただ私の不調法を償つくいませうばつかりに、一生懸命に致しましたこと  
で。それに全く一面の雪の明るさが有ったればこそで、随分遠く遠く見失いかねませぬほど隔たつても、彼方あなたの丈高い影は見え、此方は頭上から白しらはげた古かつぎを細紐ほそひもの胴ゆわいというばかりの身なりから、気取られました様子も無く、巧くゆきましたの

でございまする。」

「フム。シテ其男の落着いたところは。」

「塩孔しおなの南、歟かとおぼえまする、一丁余りばかり離れて、人家少し途絶え、ばらばら松七八本の其のはずれに、大百姓の古家か、何にせよ屋の棟の割合に高い家、それに其姿は蔵かくれて見えぬなりましたのでございまする。ばらばら松の七八本が動かぬ目処めどにございまする。」

「ム、よし。すぐに調べはつく。アア、峻さがしい世の中のため、人は皆さかしくなつてゐるとは云え、女子供までがそれほどの事をするか。よし、厭いやなことではあるが、乃公おれも何とかして呉れいでは。」

と、強い決意の色を示したが、途端に身の周囲を見廻して、手近にあつた紙おさえにしてあつた小さなものを取つて、

「遣る。」

と、女に与えた。当座の褒美と思われた。それは唐の狻猊か何かの、黄金色だの翠色だの美しく綺え造られたものだった。畳に置かれた白々とした紙の上に、小さな宝玩は其の貴い輝きを煥発した。女は其前に平伏していた。

「チュツ、チュツ、チュ、チュ」

雀の声が一霎時の閑寂の中に投入られた。

下

舳<sup>へ</sup>の松村の村はずれ、九本松<sup>くほんまつ</sup>という俚称<sup>りしやう</sup>は辛く残りながら、樹々は老い<sup>から</sup>枯び<sup>や</sup>瘦せかじけて将<sup>まさ</sup>に齡<sup>よわい</sup>尽きんとし、或は半ば削<sup>そ</sup>げ、或は倒れかかりて、人の愛護の手に遠ざかれるものの、自然の風残雪虐に堪えかねたる哀しき姿を現わしたる其の端に、昔は立派でも有つたろうが、今は不幸な家運を語る証拠物のように遺つてゐるに過ぎぬといふべき一軒屋の、ほかには母屋を離れて立腐れになりたる破れ厩<sup>まや</sup>、屋根の端の斜に地に着きて倒れ潰<sup>つぶ</sup>れたる細長き穀倉などの見ゆるのみの荒廃さ加減は、恐らくは怨<sup>おんりやう</sup>霊屋敷なんど呼ばれて人住まずなつた月日が、既に四五年以上も経たものであろう。それでも、ただ広い其の母屋の中の広座敷<sup>うち</sup>の、古畳

の寄せ集め敷しき、隙間もあれば凸凹たかひくもあり、下手の板戸は立附が  
 悪くなつて二寸も裾があき、頭があき、上手の襖ふすまは引手が脱ぬけて、  
 妖魔ようまの眼のように然ようぜんと奥かたの方ほのぐらの灰暗たいたさを湛たえている其中に、  
 主客の座を分つて安らかに対座している二人がある。客はあたた  
 かげな焦茶の小袖こそでふくよかなのを着て、同じ色の少し浅い肩衣かたぎぬ  
 の幅細なのと、同じ袴はかま。慇懃いんぎんなる物ごし、福々しい笑顔。それ  
 に引かえて主人あるじは萎なえ汚れて黒ばめる衣裳を、流石さすがに寒げに着て  
 こそは居ないが、身の瘦やせの知らるる怒り肩は稜りょうりよう々として、巖が  
 骨霜こつを帯びて屹きつぜん然そばとして聳そびゆるが如く、凜りんとして居丈高じやうかうに坐  
 った風情は、容易そばに傍そば近く寄り難いありさまである。然し其姿勢  
 にも似ず、顔だけは不思議にもにツたりと笑を含んで、眼にも嶮けわ

しい光は見せて居らぬが、それは此人が此頃何処からか仮りて来て被つてゐる仮面では無いかと疑われる、むしろ無気味なものであつた。

座の一隅には矮い脚を打つた大きな折敷に柳樽一荷置かれ  
てあつた。客が従者に吊らせて来て此処へ餉つたものに相違  
無い。

突然として何処やらで小さな鈴の音が聞えた。主人も客も其の  
音に耳を立てたというほどのことは無かつたが、主人は客が其音  
を聞いたことを覺り、客も主人が其の音を聞いたことを覺つた。  
客は其音が此家へ自分の尋ねて来た時、何処からか敏捷に飛  
出して来て脚元に戯れついた若い狗の首に着いていた余り善くも

鳴らぬ小さな鈴の音であることを知った。随したがつて新に何人かが此家へ音ずれたことを覺つた。しかし召使の百姓上りのよぼよ婆ほぼが入口へ出て何かぼそぼそと云つていたようだったが、歸つたのか入つたのか、それきりで此方へは何も通じは仕無かつた。

主人は改めて又にツたりとして、

「や、了休禅坊の御話といい、世間の評話といい、いろいろ面白うござつた。今日きょうはじめて御尋をいただいたなれど十年の知己の心持が致す。」

「左様仰あつて頂き得て、何よりにござる。人と人との氣の合うたるは好い、合いたがつたるは悪い、と然さる方が仰せられたと承わり居りまするが、まことに自然に、性分の互に反りかえらぬ同

士といふはなつかしいものでござる。」

「反りかえった同士が西と東とに立分れ、反りかえらぬ同士が西にかたまり、東にかたまり、そして応仁の馬鹿戦が起つたかな。ハハハハ。」

「イヤ、そればかりでもござりますまい。損得勘定が大きな分け隔てを致しましたろう。」

「其の損得という奴が何時も人間を引廻すのが癪しやくに障る。損得に引廻されぬ者のみであつたなら世間はすらりと治まるであらうに。」

「ハハハ。そこに又面白いことがござりまする。先ず世間の七八分までは、得に就かぬものは無いのでござりまするから、得に就

いた者が必定に得になりましたなら、世間は疾く治まりまする訳  
でござりまするが、得を取る筈の者が却つて損を取り、損をする  
筈の者が意外に得をしたり致しますことが、得て有るものでござ  
りまするので、二重にも三重にも世間は治まり兼ねるものではござ  
りますまいか。」

「おもしろい。されば愈々損得に引廻わされぬ者を世間の心に  
せねばならぬ。」

「ところが、見す見す敗けるといふ方に附く者は今の世——何時  
の世にも少いでござりましょう。されば損得に引廻されないよう  
な大将の方に旗の数が多くなろう理は先ず以て無いこととござれ  
ば、そこで世の中は面倒なのでござる。」

「癩に触る。損得勘定のみに賢い奴等、かたツばしからたたき切るほかは無い。」

「しかし、申しては憚りあることはばかでござれど」  
と声を落して、肅然として、

「正覚寺の、さきだつての戦いくさの如く、桃井、京極、山名、一色殿等の上に細川殿まで首しゅとなつて、敵勢の四万、味方は二三千とあつては、如何いかにとも致し方無く、公方、管領の御職位、御権威は有つても遂に是非なく、たたき切ろうにも力及ばず、公方は囚とらわれ、管領は御自害、律儀者の損得かまわずは、世を思切つて、僧になつて了休となるような始末、彼などは全く損得の沖を越えたものでござる。人柄はまことになつかしいものでござるが、世捨人入

道雲水ばかり出来ても善人が世に減る道理。又管領殿御臣下も多  
 人数御切腹あり、武士の行儀はそれにて宜敷けれど、世間より申  
 せば、義によつて御腹召すほどの善い方々が、それだけ世間に減  
 った道理。そういうことで世間の行末が好くなつて行こう理窟は  
 ござらぬ。これは何としても世間一体を良くしようという考え方  
 に向わねば、何時迄経つても鑕刀やかたな、修羅の苦患くげんを免れる時は来な  
 いと存じまする。」

主人は公方や管領の上を語るのを聞いてうちいる中に、やや激した  
 のであらう、にツたりと緩めて居た顔つきはややひきしま、引緊つて硬こわば  
 つて来たが、それを打消つとしようと力むるのか、裏の枯れたような高  
 笑い、

「ハツハツハ。其通り。了休がまだ在俗の時、何処からか教えられてまいったことであろうが、二ツの泥づくりの牛が必死に闘いながら海へ入つて了う、それが此世の様だと申居つた。泥牛、泥人形、みんな泥牛、泥人形。世間一体を良くしようなどと心底から思うものが何処にござろう。又仮令然様思ふ者が有つたにしても、何様すれば世間が良くなるか、其様な道を知っているものか、何処にござろう。道が分らぬから術を求め。術を以て先ずおのが角を立派にし、おのが筋骨を強くし、おのが身を大きくしようとする。其段になればやはり闘だ。如何に愛宕の申子なればとて、飯綱愛宕の魔法を修行し、女人禁制の苦を甘ない、経陀羅尼を誦して、印を結び呪を保ち、身を虚空に騰らせようなどと、魔道の

もと  
 下に世をひれ伏さしよとすほどのたわけ者が威を振って、公  
 方を手づくねの泥細工で仕立つる。それが当世でござる。癩に触  
 らいでか。道も知らぬ、術も知らぬ、身柄家柄も無い、頼むは腕  
 一本限りの者にとつては、氣に食わぬ奴は容赦無くたたき斬つて、  
 時節到来の時は、つんのめつて海に入る。然様したスツキリした  
 心持で生きて、生きとおしたら今宵死んでも可い、それが又自然  
 に世の中の為にもなるう。ハハハハハハ。」

「それで世の中は何時迄も修羅道つづきで……御身は修羅道の屈  
 原のような。」

「ナニ、屈原とナ。」

「心を厳しく清く保つて主に容れられず、世に容れられず、  
 汨羅<sup>ベキラ</sup>

に身を投げて歿なくなられた彼のあの。」

「フ、フ。ヤ、それがしはおとなしくは死なぬ、暴れ屈原か。ハハハハ。」

「世を遁のがれて仏道に飛込まれた彼の了休禅坊はおとなしい屈原で。」

「ハハ、ハハ。良い男だが、禪に入るなど、ケチな奴で。」

「失礼御免を蒙こうむりまするが、たたき斬り三昧さんまいで、今宵死んで悔いぬとのみの暴れ屈原も……」

「貴様の存分な意見からは……」

「ケチではござらぬかナ。と申したい。」

「アツハツハ。何でまた。」

「物さしで海の深さを測る。物さしのたけが尽きても海が尽きたではござらぬ。今の武家の世も一世界でござる、仏道の世界も一世界でござる、日本国も一世界でござる。が、世界がそれらで尽きたではござらぬ。高麗こうらい、唐土もろこし、暹羅国シヤム、カンボジャ、スマトラ、安南あんなん、天竺てんじく、世界ははて無く広がって居ります。この世界が癩らいに触るとて、癩らいに触らぬ世界もござろう。紀伊の藤代たいせんから大船たいせんを出して、四五十反の帆に東々北の風を受ければ、忽たちまちにして煩わしい此の世界はこちらに残り、あちらの世界はあちらに現われる。異つた星の光、異つた山の色、随分おもしろい世界もござるげな。何といろいろの世界を股にかける広い広い大きな渡海商いの世界から見ましようなら、何人が斬れるでも無い

一本の刀で 癩かんしやく 癩いやく の腹を癒いやそうとし、時節到来の暁は未練なく死のうまでよと、身を諦めて居らるる仁有らば、いさぎよくはござれど狭い、小さい、見て居らるる世界が小さく限られて、自然と好みも小さいかと存ずる。大海だいかいに出た大船の上で、一天の星かぶとを兜きに被て、万里の風に吹かれながら、はて知れぬ世界むかに對つて武者振りして立つ、然様きようがいいう 境き 界がいもあるのでござりまするか  
ら」

と言いかけたる時、狗の鈴の音しきりに鳴りて、又此家に人の一人二人ならず訪とい来れる様子との感ぜらる。

此時主人は改めて大きくにツたりと笑つて、其眼は客まさめを正目に  
見ながら、

「如何にも手広い渡海商いは、まことに心地よいことでござろう。小さな癩癩などは忘るるほどのことでもござろう。然しナ、其の大海の上で万里の風に吹かれながら、真蒼まっさおの空の光を美しいと見て立っている時、これから帰り着くべき故郷の吾わが家でノ、最愛の妻が明るうないことを仕居つて、其召使が誤つて……あらぬ男を引入れ、そして其のケチな男に手証の品を握つて歸られた……と知つたなら、広い海の上に居ても、大腹中でも、やはり小さな癩かんしやく癩かんしやくが起らずには居まいがナ。」

と、三斗おすいの悪水は驀まっそう向まっそうから打澆うちかけられた。

客は愕がくぜん然ぜんとして急に左の膝を一膝引いて主人あるじを一ト眼見たが、直に身を伏せて、少時しばしは頭かしらを上げ得無かつた。然し流石さすがは老骨だ。

「恐れ入りました。」

と、一句、ただ一句に一切を片づけて了つて、

「了休禅坊とは在俗中も出家後も懇意に致居りましたを手寄りたよりに、御尋致しましたるところ、御隔意無く種々御話し下され、失礼な

がら御気象も御思おぼしめし召も了休御噂の如く珍しき御器量に拝し上げ、

我を忘れて無遠慮に愚存など申上げましたが、ひつきょう畢 竟は只今御

話の一品を頂戴致したい旨を申出ずるに申出兼ねて、なごかに何彼、右左、

と御物語致し居りたる次第、但し余談とは申せ、いつわ詐り飾りは申し

たのではござりませぬ、御覧の如くの野人にござります。何卒

了休禅坊御懇親の御縁に寄り、私の至情御汲取り下されまして、

私めまで右品御戻しを御願ひ致します。御無礼、御叱りには測

り兼ねまするが、今後御熟懇、永く御為に相成るべき者と御見知り願ひ度、猶なお不な日お了休禅坊同道相伺ひ、御礼に罷まかりで出でます、重々御恩に被きますることでござります。親子の情、是かくの如く、眞実心を以て相願ひまする。」

と、顔を擡あげてじつと主人を見る眼に、涙のさしぐみて、はふり墜おちんとする時、また頭かしらを下さげた。中々食えぬ老人としよりには相違無ないが、此時の顔つきには福々あふしさも凶ずうずう々ずうしさも無なくなって、ただ真面目ばかりが充ち溢あふれていた。ところが、それに負けるような主人では無なかった。

「いやでござる。」

と言下に撥はねかえした。にツたりとはして居いなかつた、苦りかえ

っていた。

「おいやと御思いではござりましようが、何卒御思い返し下されまして、……何卒、何卒、私娘の生命いのちにかかることとでござりまする。」

「……………」

「あの生おいとま先長なげいものが、酷むごらしいことにもなりまするのでござりまするから。」

「……………」

「何としても、私、このままに見ては居れませぬ。仏とも神とも仰ぎたてまつります。何卒、何卒、御あわれみをもちまして。」

「……………」

「如何様の事でも致します。あれさえ御返し下さりようならば、如何様の事を仰せられましよう、必ず仰のままに致します。

何卒、何となりと仰せられて下さりませ。何卒何卒。」

「……………」

「斯程かほどに御願ひ申上げて、よしあし共に仰せられぬは、お情無い。私共を何となれとの御思召か、又彼品かのしなを何となさりよう御思召か。何の御役に立ちましようものでもござりますまいに。」

「御身等を、何となれとも、それがしは思っておらぬ。すべて他人の事に差図あずがましいことすることは、甚だ厭いとわしいことにして居るそれがしじゃ。御身等は船の上の人が何とか捌さばこうまでじゃ。少しもそれがしの関あずからぬことじゃ。」

「如何にも冷い厳しい……彼の品は何となさる思召で。」

「彼品は船の上の人の帰り次第、それがしが其人に逢い、かくかくの仔細しさいで、かくかくの場合に臨んだ、其時の証として仮りに持帰った、もとより御身の物ゆえ御身に返す、と其人に渡す。それがしの為すべきことはそれだけのことじゃ。」

「何故に、然さよう様なさりませねばならぬと固くは御思いになりまする？」

「表裏反覆の甚だしい世じゃ。思うても見られい、公方と管領とが総州を攻められた折は何様どうじゃ。総州が我がを立てたが故に攻められたのじゃ。然るに細川、山名、一色等は公方管領を送り出して置いて、長陣ながじんに退屈させて、桂の遊女を陣中に召さするほど

に致し置き、おのれ等ゆるゆると大勢たいぜいを組揃え、急に起たつて四方より取囲み、其謀計合期ごうごしたれば、管領は御自害ある。留守の者が急に敵になつて、出先の者を攻めたでは出先の者の亡びぬ訳は無い。恐ろしい表裏の世じや。ましてそれがしが、御身の妻女はこれこれと、其の良からぬことを告げたところで、証拠無ければただ是讒言ざんげん。女の弁舌に云廻されては、男は却かえつてそれがしをこそ怪しき者に思え、何で吾わが妻女を疑い、他人を信としようぞ。惣そうじてかかる場合、たといそれがしが其家譜代の郎党であつて、忠義かねて知られたものにせよ、斯様の事を迂闊うかつに云出さば、却つて逆に不埒者ふらちものに取つて落され、辛き目に逢うは知れた事、世上に其例ためしいくらも有り。又後暗いことするほどの才ある女が、

其迷いが募つては何ぞの折に夫を禍するに至ることも世に多きた  
めし。それがしが彼人かのひとに証を以て告口せずかひとに置かば、彼人の行末  
も空恐ろしく、又それがしは悪を助けて善を助けぬ外道魔道の眷け  
属んぞくとなる。此の外道魔道の眷属が今の世には充ち満ちている。

公方を追落し、管領を殺したも、皆かかる眷属共の為たことであ  
る。何事も知らぬ顔して、おのが利得にならぬことは指一ツ動か  
さず、ぬつペリと世を送りくさつて、みずから手は下さねど、見  
す見す正道の者の枯れ行き、邪道の者の榮え行くのを見送つてい  
る、癩かんに触る奴めらが世間一杯。一々たたき斬きつて呉れたい虫け  
らども。其虫けらにそれがしがなろうや。もとよりとげとげしい  
今の此世、それがしが身の分際では、朝起きれば夕までは生命あ

りとも思わず、夜を睡れば明日あしたまであたたかであろうとも思わず、今すぐここに切死にするか、切り殺さるるか、と突詰め突詰めて時を送っている。殊更此頃は進んでも鎗やりぶすまの中に突懸り、猛火の中にも飛入ろう所存に燃えておる。癩に触るものは一ツでも多く叩き潰つぶし、一人でも多く叩き斬ろうに、遠慮も斟しん酌やくも何有ろう。御身は器量骨柄も勝すぐれ、一風ある氣象もおもしろいで、これまでは談はなしも交したなれど、御身の頼みは聴入れ申さぬ。「と感慨交りに厳しくことわられ、取とり継すろうすべも無く没義道もぎどうに振放された。

「かほどまでに真実まことを尽して御願ごんい申しましても。」

「いやでござる。」

「金銀財宝、何なりと思召す通りに計らいましても。」

「いやでござる。」

「何事の御手助けなりとも致しましても。」

「いやでござる。」

「如何様にも御指図下さりませれば、たとい仮令臙脂屋身代ことごと悉く灰となりましても御指図通りに致しまするが……」

「いやでござる。」

ここに至つて客の老としより人は徐ろに頭を擡あげた。艶やかに兀はげた前頭からは光りが走つた。其の澄んだ眼はチラリと主人を射た。が、又忽たちまちに頭かしらを少し下げて、低い調子の沈着な声で、

「おろかしい獣は愈々いよいよかなわぬ時は刃物をも咬かみまする、あわ

れに愚かしいことでござります。人が困じこころきりますれば碌ろくでないことをも致しまする、あわれなことでござりまする。臙脂屋は無智のものでござりまする、微力なものでござりまする。しかし碌でないことなど致しまする心は毛頭持ちませぬが、何とか人を困じこころさせぬように、何とか御燐み下されまするものも、正しくて強い御方に、在つて宜い御余裕かと存じまするが……」

と、飽あまで下からは出て居るが、底の心は測り難い、中々根強い言廻しに、却つて激したか主人は、声の調子さえ高くなつて、

「何と。求めて得られぬものは、奪うという法がある、偷ぬすむという法もある、手だれの者を頼んでそれがしを斬殺して了うという法もある、公辺の手を仮りて、怪しき奴と引括ひっくくらせる法もある。

無智どころでは無い、器量人で。微力どころではない、瘦牢やせろうにん人には余りある敵だ。ハハハハ、おもしろい。然様そう出て来ぬにも限らぬとは最初から想っていた。火が来れば水、水が来れば土。いつでも御相手の支度はござる。」  
 ののし  
 と罵るように云うと、客は慌てず両手を挙げて、制止するようにし、

「飛んでも無い。ハハハ。申しようが悪うござりました。私、何でおろかしい獣になり申そう。ただ立端たばが無いまで困こうじきつて、御余裕のある御挨拶を得たさの余りに申しました。今一応あらためて真実心を以て御願ごんい致します。如何様の事ことにても、仮令たとい臙脂屋を灰と致しましても苦しゅうござりませぬ、何卒かのしな彼品御かえ

し下されますよう折入つて願ひ上げます。真実まこと、斯この通り…

…」

と誠実こめて低頭じげするを、

「いやでござる。」

と膠にべも無く云放つ。

「かほどに御願ひ申しまして。」

「くだい。いやと申したら、いやでござる。」

客は復ふたび涙の眼になつた。

「余りと申せば御情無い。其品を御持になつたればとて其方様そなたさまには何の利得のあるでも無く、此方こなたには人の生命いのちにもかかわるものを…。相済みませぬが御恨めしゆう存じまする。」

「恨まれい、勝手に恨まれい。」

「我等の仇あだでもない筈にあらせらるるに、それでは、我等を強い  
て御仇になさると申すもの。」

「仇になりたくばならるるまで。」

「それでは何様どうあつても。」

「いやでござる。もはや互に言うことはござらぬ。御引取なされ  
い。」

「ハアツ」

と流石さすがの老としより人も男泣に泣倒れんとする、此時足音いと荒く、

「無作法御免。」

と云うと同時に、入側いりがわ様になりたる方より、がらりと障子を手

ひどく引開けて突入し来たる一個の若者、芋虫いもむしのような太い前差、くくり袴ばかまに革足袋かわたびのものものしき出立、真黒な髪、火の如き赤き顔、輝く眼、年はまだ二十三四、主人あるじの傍かたえにむんずと坐つて、臙脂屋の方へは会釈も仕忘れ、傍に其人有りともせぬ風で、屹きつとして主人の面おもてを見守り、逼せまるが如くに其眼を見た。主人は眼をしばたたいて、物言うなど制止したが、それを悟つてか悟らいでか、今度はくるり臙脂屋の方へ向つて、初めて其面をまともに見、傲ご然うぜんとして軽く会釈し、

「臙脂屋御主人と見受け申す。それがしは牢人丹下右膳。」  
と名乗つた。主人は有らずもがなに思つたらしいが、にツたりと無言。臙脂屋は涙を収めて福々爺ふくふくおやえに還り、町寧ていねいに頭かしらを下げて、

「堺、臙脂屋隠居にござりまする。故管領様御内、御同姓備前守様御身寄にござりますか、但しは南河内の……」

と皆まで云わせず、

「備前守弟であるわ。」

と誇らしげに云つて、ハツとはげあたま頭が復び下げられたのに、年

若者だけ淡い満足を感じたか機嫌が好く、

「臙脂屋。」

と、今度ははや呼びすてである。然し厭味いやみは無くて親しみはあつた。

「ハ」

と、老人は若者の目を見た。若い者は無邪気だった。

「其方は何か知らぬが余程の宝物を木沢殿に所望致し居って、其願が聴かれぬので悩み居るのじゃナ。」

「ハ」

「一体何じや其宝物は。」

「……………」

「靈驗ある仏体かなんぞか。」

「…………ではござりませぬ。」

「宝剣か、玉ぎよくか、唐からわた渡りのものか。」

「でもござりませぬ。」

「我邦かのくに彼邦たぐいの古筆、名画の類たぐいでもあるか。」

「イエ、然様さようのものでもござりませぬ。」

「ハテ分らぬ、然らば何物じや。」

「……………」

主人は横合より口を入れた。

「丹下氏、おきになされ。貴殿にかかわったことではござらぬ。」

「ハハハ。一体それがしは宝物などいうものは大嫌い、鼻汁はなかん

だら鼻が黒もうばかりの古臭い書画や、二本指で捻ひねり潰つぶせるよう

な持もて遊あそび物を宝物呼よばわりをして、立派な侍の知行何年振りの

価をつけ居る、苦々しい阿房あほうの沙汰じや。木沢殿の宝物は何か知

らぬが、涙こぼして欲しがるほどの此老人に呉れて遣つて下され

ては如何でござる。喃のう、老人、臙脂屋、其方に取つては余程欲し

いものと見えるナ。」

「然様でござりまする。上も無く欲しいものにござりまする。」

「ム、然様か。臙脂屋身代を差出しても宜いように申したと聞いたが、しかと然様か。」

「全く以て然様で。如何様の事でも致しまする。御渡しを願えますれば此上の悦よろこびはござりませぬ。」

「と然様じゃナ。」

「御当家木沢左京様、又丹下備前守様御弟御さまほどの方々に対して、臙脂屋虚言うそ詐つりは申しませぬ。物の取引に申出を後へ退ひくようなことは、商あき人ゆうの決して為せぬこととござりまする。臙脂

屋は口広うはござりまするが、商人でござりまする。日本国は泉州堺の商人でござる。高麗大明、安南天竺、南蛮諸国まで相手に

致しての商人でござる。御武家には人質を取るとか申して、約束へんがい変改を防ぐ道があると承わり居りまするが、其様なことを致すようでは、商人の道は一日も立たぬのでござりまする。御念には及びませぬ、臙脂屋は商人でござる。世界諸国に立たちむか対い居る日本国の商人でござりまする。」

と暗に武家をさのえ罵つて、自家の気を吐き、まだ雛ひなどり雞である右膳を激動せしめた。右膳は真赤な顔を弥いやが上に赤くした。

「ウ、ほざいたナ臙脂屋。小気味のよいことをぬかし居る。其儀ならば丹下右膳、汝そちの所望を遂げさせて遣わそう。」

「ヤ、これは何ともはや、有難いこと。御助け下さる神様と仰ぎ奉りまする。」

と真心見せて臙脂屋は平伏したが、ややあつて少し頭かしらを上げ、憂  
わし氣に又悲しげに右膳を見て、

「トは仰おっしあつて下さりましても。」

と、恨めし氣に主人の方を一寸見て、又急に丹下の前に頭を下げ、  
「や、ナニ。何分御骨折、宜しく願います。事叶わずとも、  
…重々御恩には被きますでござります。」  
と萎しおれて云つた。

雛雞は頸くびの毛を立てんばかりの勢になつた。にツたりはにツた  
りで無くなつた。

「木沢殿」と呼ぶ若い張りのある声と

「丹下氏」と呼ぶ緩ゆるい錆さびた声とは、同時に双方の口から発して

かち合つた。

二人が眼々相看た視線の箭は其鏃と鏃とが正に空中に突当つた。が、丹下の箭は落ちた。木沢は押し被せるように、

「おきになされい、丹下氏。貴殿にかかわつた事ではござらぬ。

左京一分だけのずんと些細なことでござる。」

と冷やかに且つ静かに云つた。軽く若者を払い去つて了おうとしたのであつた。然し丹下の第二箭は力強く放たれた。

「イヤ、木沢殿。御言葉を返すは失礼ながら、此の老人の先刻よりの申状、何事なりとも御意のまにまに致しますとの誓言立、御耳に入らぬことはござるまい。臙脂屋と申せば商人ながら、堺の町の何人衆とか云われ居る指折、物も持ち居れば力も持ち居る

者。ことに只今の広言、流石さすがは大家たいけの、中々の男にござる。貴殿御所持の宝物、如何ようのものかは存せぬが、此男に呉れつかわされて、誓言通り此男に課状あはせを負わさば、我等が企も」と言いかくるを、主人あるじ左京は遽あわただしく眼と手とに一時に制止して、

「卒爾そつじにもものを言わるる勿な。もう宜よい。何と仰せられてもそれがしはそれがし。互に言募れば止まりどころを失う。それがしは御相手になり申せぬ。」

と苦りきつたる真面目顔、言葉の流れを截きつて断たんとするを、  
右膳は

「ワツハハ」

と大河の決するが如く笑つて、木沢が膝と我が膝と接せんばかりに詰寄つて逼りながら、

「人の耳に入つてまこと悪くば、聴いた其奴を捻りつぶそうまで。臙脂屋、其方が耳を持ったが氣の毒、今此の俺に捻り殺されるか知れぬぞ。ワツハハハ」

と狂氣笑いする。臙脂屋は聞けども聞かざるが如く、此勢に木沢は少しにじり退りつつ、益々毅然として愈々苦りきり、

「丹下氏、おしずかに物を仰せられい。」

と云えども丹下は鎮まらばこそ、今は眼を剥いて左京を一睨みし、右膝に置ける大の拳に自然と入りたる力さえ見せて、

「我等が企と申したが御氣に障つたそうだが、関わぬ、もはや関

わぬ、此の機しおを失つて何の斟しん酌しやく。明日あすといい、明後日あさつてといい、又明日といい明後日と云い、何の手筈がまだ調わぬ、彼かにの用意がまだ成らぬと、企を起してより延び延びの月日、人々の智慧才覚は然さもあろうが、丹下右膳は倦うんじ果て申した。臙脂屋のじじい、それ、おのれの首が飛ぶぞ、用心せい、そもそも我等の企と申すのはナ

と云いかけて、主人の面おもてをグツと睨む。主人も今は如何ともし難しと諦めてか、但しは此一場の始末を何とせんかと、※底きょうてい深く考え居りてか、差当りて何と為ん様子も無きに、右膳は愈々勝に乗り、

「故管領殿河内の御陣にて、表裏異心のともがらの奸かんけい計に陥入

り、にわか俄に寄する数万すまんの敵、味方は総州征伐のためのみの出先の小勢、ほかに援兵無ければ、先ず公方をば筒井へ落しまいらせ、十三歳の若君ひさよし尚慶殿ともあるものを、卑しき桂の遊女の風情に粧よそいて、平たいらの三郎御供申し、大和やまとの奥郡おくごおりへ落し申したる心外さ、くちおし口惜さ。四月九日の夜に至つて、人々最後の御盃、御腹お召されんとて藤四郎の刀を以て、三度まで引給えど曾かつて切れざりしとよ、ヤイ、合点が行くか、藤四郎ほどの名作が、切れぬ筈も無く、我が君の怯おくれたまいたるわけも無けれど、皆是れ御最期までも吾わが君の、世を思い、家を思い、臣下を思いたまいて、孔子こうしが魯ろの国を去りかね玉いたる優しき御心ぞ。敵愈々逼りたれば吾が兄備前守

と此処まで云いて今更の感に大粒の涙ハラハラと、

「雑兵共に踏入れられては、御かばねの上の御恥も厭いとわしと、冠落かむ

しの信国が刀を抜いて、おのれが股ももを二度突通し試み、如何にも

刃味宜よしとて主君に奉る。今は斯様こうよとそれにて御自害あり、近

臣一同も死出の御供、城は火をかけて、灰今冷やかなる、其の残

った臣下の我等一党、其儘そのままに草に隠れ茂みに伏して、何で此世

に生命いのち生きようや。無念骨髓に徹して齒を咬かみ拳を握る幾月日、

互に義に集まる鉄石の心、固く結びてはかりごとを通じ力を合せ、

時を得て風を巻き雲を起し、若君尚慶殿を守立てて、天翔あまかくる竜

の威を示さん存念、其企も既に熟して、其時もはや昨今に逼った。

サ、かく大事を明かした上は、臙脂屋、其座はただ立たせぬぞ、

必ず其方、武具、ひょうろう兵糧、人夫、馬、車、此方の申すままに差

出さするぞ。日本国は堺のあきゆうど商人、商人の取引、二言は無いと

申したナ。木沢殿所持の宝物は木沢殿から頂戴して遣わす。宜いではござらぬか、木沢殿。失礼ながら世に宝物など申すは、いずれ詰らぬ、下らぬもの。心よく呉れて遣つて下されい。我等同志がためになり申す。……默然として居らるるは……」

「不承知と申したら何となさる。」

「ナニ。いや、不承知と申さるる筈はござるまい。と存じてこそかく是の如く物を申したれ。まこと真実、たつて御不承知か。」

「臙脂屋を捻り潰つぶしなさらねばなりませんまいがノ。貴殿の御存じ寄り通りになるものとのみ、それがしを御見積りは御無体でござ

る。」

「ム」

「申した通り、此事は此事、左京一分の事。我等一党の事とは別の事にござる。」

「と云わるるは。扱さては何処までも物惜みなされて、見す見す一党の利になることをば、御一分の意地によつて、丹下右膳が申す旨、御用い無いとかッ。」

目の色は変つた。紫の焰ほのおが迸とばしり出たようだった。怒つたのだ。

「……………」

「然程さほどに物惜みなされて、それが何の為になり申す。」

「何の為にもなり申さぬ。」

と憎いほど悠然と明白に云つて退けた。右膳は呆れさせられたが、何の為にもなり申さぬと云つた言葉は虚言うそでは無かつたから仕方が無かつた。

「何の為にもならぬことに、いやと申し張らるることもござるまい。応と言われれば、日頃の本懐たちまも忽ち遂げらるる場合にござる手段は既に十分にととのい、敵將を追落し敵城を乗取ることふくろ、囊の物を探るが如くになり居れど、ただ兵糧其他の支えの足らぬため、勝つても勝を保ち難く、奪つても復奪またわるべきおもんばかを慮り、それ故に老巧の方々かたがた、事を挙ぐるに挙げかね、現に貴殿も日夜此段に苦んで居らるるではござらぬか。然るに、何かは存ぜず、渡りに舟の臙脂屋が申出、御用いあるべしと丹下が申出したは不埒ふらちで

ござろうや。損得利害、明白なる場合に、何を洩らるるか、此の右膳には奇怪きっかいにまで存ぜらる。主家に対する忠義の心の、よもや薄い筈の木沢殿ではござるまいが。」

と責むるが如くに云うと、左京の眼からも青い火が出たようだった。

「若輩の分際として、過言にならぬよう物を言われい。忠義薄きに似たりと言わぬばかりの批判は聞く耳持たぬ。損得利害明白なと、其の損得沙汰を心すずしい貴殿までが言われるよナ。身ぶるいの出るまで癩しゃくにさわり申す。そも損得を云おうなら、善悪ぜんなくじや

邪しやう正定しやうまらぬ今の世、人の臣となるは損の又損、大だわけ無器量しゆでも人の主しゆとなるが得、次いでは世を棄てて坊主になる了休如

きが大の得。貴殿やそれがし如きは損得に眼などが開いて居らぬ者。其損得に掛けて武士道——忠義をこつたにし、それはそれ、これはこれと、全く別の事を一ツにして、貴殿の思わくに従えとか。ナニ此の木沢左京が主家を思い敵を悪む心、貴殿に分寸もおくれ居ろうか、無念骨髓に徹して遺恨已み難ければこそ、此の企も人先きに起したれ。それを利害損得を知らぬとて、奇怪にまで思われるとナ。それこそ却つて奇怪至極。貴殿一人が悪いではないが、エーイ、癩に触る一世の姿。」

「訳のよく分らぬことを仰せあるが、右膳申したる旨は御取あげ無いか。」

「……………」

「必ず御用いあることと存じて、大事も既に洩もらしたる今、御用いなくば、後へも前まへへも、右膳も、臙脂屋も動きが取れ申さぬ。

ナ、御返答は……」

「……………」

「主家のためなり、一味のためなり、飽まで御返辞無きに於ては、事すでに逼せまつたる今」

と、決然として身を少く開く時、主人の背後うしろの古ふる襖ぶすま左右へ急に引除ひきのけられて、

「慮外御免。」

と胴太き声の、蒼く黄色く肥つたる大きな立派な顔の持主を先に、どやどやと人々入来りて木沢を取巻くように坐る。臙脂屋早

く身退りし、丹下は其人を仰ぎ見る、其眼を圧するが如くに見て、

「丹下、けしからぬぞ、若い若い。あやまれあやまれ。後輩の身を以て——。御無礼じやつたぞ。木沢殿に一応、斯様に礼謝せい

。」

と、でつぷり肥つたる大きな身体を引包む緞子の袴肩衣、威儀

堂々たる身を伏せて深々と色代すれば、其の命拒みがたくて丹

下も是非無く、訳は分らぬながら身を平め頭を下げた。偉大の男

はそれを見て、笑いもせねば褒めもせぬ平然たる顔色。

「よし、よし、それでよし。よくあやまってくれたぞ、丹下。木

沢氏、あの通りにござる。卒爾に物を申し出したる咎、又過言に

も聞えかねぬ申しごと、若い者の無邪気の事でござる。あやまり

入った上は御免し遣わされい。さて又丹下、今一度ただ今のよう  
 に真心籠めて礼を致してノ、自分の申したる旨御用い下されと願  
 え。それがしも共に願うて遣わす、斯くの通り。」  
 と、小山を倒すが如くに大きな身を如何にも礼儀正しく木沢の  
 前に伏せれば、丹下も改めて、

「それがしが申したる旨御用い下さるよう、何卒、御願い申しま  
 する木沢殿。」

という。猶未だ頭を上げなかつた男、胴太い声に、

「遊佐河内守、それがしも同様御願い申す。」

と云い、

「エイ、方々は何をうっかりとして居らるる。敵に下ぐる頭で

はごぎらぬ、味方同士の、兄弟の中ではごぎらぬか。」

と叱しつすれば、皆々同じく頭を下げて、

「杉原太郎兵衛、御願ひ申す。」

「斎藤九郎、御願ひ申す。」

「貴志余一郎、御願ひ申す。」

「宮崎剛蔵……」

「安見宅摩も御願ひ申す。」

と洩い声、砂利声、がさつ声、尖とがり声、いろいろの声で巻き立て頼み立てた。そして人々の頭は木沢の答のあるまでは上げられなかった。丹下はむずむずしきった。無論遊佐の見じろぎの様子一ツで立上るつもりである。

「遊佐殿も方々も御手あげられて下されい。丹下右膳殿御申出通りに計らい申しませう。」

人々は皆明るい顔を上げた。右膳は取分け晴れやかな、花の咲いたような顔をした。臙脂屋の悦よろこんだのはもとよりだったが、遊佐河内守は何事も無かつたような顔であつた。そして忽たちまちに臙脂屋むかに対つて、

「臙脂屋殿。」

と殿づけにして呼びかけた。臙脂屋は

「ハ」

と恐縮して応ずると、

「只今聞かるる通り。就ては此方より人を差添え遣わす。貴志余

一郎殿、安見宅摩殿、臙脂屋と御取合下されて、万事宜敷御運び下されい。ただし事皆世上には知られぬよう、臙脂屋のためにも此方のためにも、十二分に御斟酌ごしんしゃくあられい。ハテ、心地よい。木沢殿、事すでにすべて成就も同様、故管領御家再興も眼に見えてござるぞ。」

というと、人々皆勇み立ち悦ぶ。

「損得にはそれがしも引廻されてござるかナ。」  
と自ら疑うように又自ら歎たんずるように、木沢は室へやの一隅を睨にらんだ。

其後幾日いくかも無くて、河内の平野の城へ突として夜打がかかった。

城將桃井兵庫、客將一色何某なにがしは打つて取られ、城は遊佐河内守等の拠るところとなつた。其一党は日に勢を増して、漸ようやく旧威を揮ふるい、大和に潜んで居た畠山尚慶を迎えて之を守立て、河内の高た屋かやに城を構えて本拠とし、遂に尚慶をして相当に其大を成さしむるに至つた。平野の城が落ちた夜と同じ夜に、誰がしたことか分らなかつたが、臙脂屋の内に首が投込まれた。京の公卿方くげがたの者で、それは学問諸芸を堺の有徳の町人の間に日頃教えていた者だつたということが知られた。



# 青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第4巻」小学館

1989（平成元）年4月1日初版第1刷発行

底本の親本：「露伴全集 第六巻」岩波書店

1978（昭和53）年7月18日

入力：kompass

校正：今井忠夫

2003年5月18日作成

2012年5月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雪たたき

幸田露伴

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>